

文系学部留学生を対象としたクラスにおける ビブリオバトル実施

— 要約に焦点を当てた授業において —

堀 恵子（筑波大学・東洋大学）
khor i34@gmail.com

【要約】

学部2年生向け留学生クラスにおいて、好きな本を紹介し、参加者全員が最も読みたくなった本をチャンプ本に選ぶ書評ゲーム「ビブリオバトル」を行った。発表では、コース前半で行った読解—要約活動を生かし、聞き手にわかりやすい発表が見られた一方、情報の過不足によって理解が阻害された発表も見られた。今後はピアで読み合って内容理解を深め、要約を自らの言葉で話して語彙力・文法力を高める活動を取り入れていきたい。

1. 背景と本実践研究の目的

ブリオバトルとは、参加者がおもしろいと思う本を人に勧めるために書評のスピーチを行い、最も読みたくなった本を全員の投票で決める「書評ゲーム」（谷口 2013）である。近年、大学のみならず、広く教育機関、学会、図書館活動などに取り入れられ、「書評を媒介としたコミュニケーションの場づくり手法」（前掲 p.16）として活用されている。ブリオバトルには、本を読む、内容を要約する、発表する、質問する、ディスカッションをすることといった総合的な活動が含まれ、また各自が好きな作品や記事を紹介するため、活動自体を楽しく行うことができる。そこで、近年日本語教育にも取り入れられている（山路・須藤・李 2013、菅原・虫明 2014、堀 2015）。

本稿で取り上げる実践授業は、文系学部2年の留学生を対象とした「日本語と日本文化」というクラスで、日本語を学びながら日本文化に対する理解を深めることを目標としている。半年のコースの前半では読解教材を読んで文法力、語彙力を高めつつ、内容を把握し要約するタスクを、ピア活動、グループ活動を取り入れて行っている。コースの後半にはそれまでに学んだことを総合的に行う活動としてブリオバトルを実施している。

本稿では、読解の要約をブリオバトルにどのように取り入れて発表を行ったか例を挙げて分析し、コース後の学習者の振り返りも参考にして、今後のブリオバトル活動に必要な事柄について検討する。

2. 日本語教育におけるビブリオバトル

2.1 ビブリオバトルとは

ブリオバトルとは、前章で述べたように書評ゲームであるが、公式ルールは下記のように規定されている（谷口 2013 : 16）。

- (1) 発表参加者が読んで面白いと思った本を持って集まる
- (2) 順番に一人5分間で本を紹介する
- (3) それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に関するディスカッションを2～3分行う
- (4) 全ての発表が終了した後に「どの本が一番読みたくなかったか？」を基準とした投票を参加者全員一票で行い、最多票を集めたものを『チャンプ本』とする

さらに、各ルールの補足があるが、基本は上記4点のルールを守ればよく、レジユメの使用も禁止しているわけではない。

本実践では、留学生にとって聞くだけでお互いの発表を100%理解することは難しいと考え、A4で1枚分のレジユメを作成させている（後述）。

2. 2 日本語教育におけるビブリオバトル

日本語教育にブリオバトルを取り入れた実践報告には、山路ほか（2013）、菅原・虫明（2014）、堀（2015）がある。山路ほか（2013）は、学習者のアンケートから、聴衆の理解や共感に対する配慮が生じ、プレゼンテーションを行うことへのモチベーションが高まったとしている。

一方、菅原・虫明（2014）は意見スピーチとブリオバトルとに含まれる表現類型を比較し、ブリオバトルでは聞き手に直接問いかける質問や、本を勧めるといった聞き手に働きかける表現類型が多く使用されていたと指摘した。これに対し、堀（2015）は、11名の発表に使用された文の表現類型を菅原・虫明（2014）に倣って分類し、クラスメート同士のルーブリックによる評価との相関を調査した結果、聞き手への働きかけの多さと評価の高さとは無関係であったと報告している。すなわち、働きかけの表現類型が多く使用されていても、それが直ちに聴衆の評価につながるわけではないことが明らかになった。その上で、『ブリオバトル首都決戦』¹で高い評価を受けた15本の発表（日本語母語話者）のテキストを分析して、高い評価を受ける8つの条件をまとめている。

- (1) 本の内容が簡潔に述べられ、聞き手が内容を必要かつ十分推測できる。
- (2) 自分の感動をわかりやすく伝える（自己開示）。
- (3) 話し手の感動は特殊なことではなく、広く聞き手に共有できる感動であることを表現する。
- (4) 作品の最後まで語り尽くさない（ネタバレしない）。
- (5) 冒頭で聞き手を引き付ける仕掛け（呼びかけ、質問など）を工夫している。
- (6) 緊張しすぎず、リラックスしている。
- (7) 言葉が生きている（×覚えた言葉を再生しているという印象を与える、×原稿読みあげ）。
- (8) 適切なスピードで話す。

3. 学習者のアカデミックな場面における日本語能力の問題点

前章のブリオバトルにおいて高い評価を受ける条件は、アカデミックな場面における発表や、より広く大学生が直面するであろう場面において身につけてほしいスキルであると考えられる。しかしながら、同時に、習得が困難な点でもあると考えられる。特に重要と考えられる条件の(1)から(3)として上げた3項目を再掲し、問題点を挙げる。

1 2011年から2013年までは東京都などが主催して行われたブリオバトルの大会で、各地の予選会を勝ち抜いた大学生・大学院生が参加した。YouTubeで見ることができる。2014年以降は主催者を変更して続けられている。
<<http://zenkoku.bibliobattle.jp/>>

(1) 本の内容が簡潔に述べられ、聞き手が内容を必要かつ十分推測できる。

本実践コースの前半で読解活動の一部として、各段落のキーワードに印をつけ、それを手がかりに各段落の要点をまとめ、さらに文章全体の要約を書くという活動を繰り返し行ったが、的確な要約を全員が行えるようになったとは言いがたい。特に、要点となる文を抜き書きすることはできるが、自分の言葉でまとめることは容易ではない。

これについて藤村（1998）は、日本語母語話者と学習者の2群に対して500字の提言を要約させる調査を行った結果、複数の原文をパラフレーズする「連合文」の産出は種類も量も、母語話者>上位学習者>下位学習者の順であったと述べている。学習者は原文のある1文を中心に、足りない情報を他から補うタイプの要約が多いことが観察された。また、八若（2001）は、読解力によって分けた2群の日本語学習者を比較し、藤村（1998）と同じ刺激文を用いて調査を行い、上位群に比べて下位群では原文のコピーが多く、言い換えや独自の説明が少ないと指摘している。

(2) 自分の感動をわかりやすく伝える

昨年度までの筆者が行った発表活動においても「留学中に見つけた日本語の言語文化」をテーマに発表を行ってきたが、自らの感動を説明する時に、「すごいです。」「わあと思った。」のような表現を用いるだけで、その詳しい説明を聞き手にわかりやすく伝えることは時に非常に困難なことがあった。

(3) 話し手の感動は特殊なことではなく、広く聞き手に共有できる感動であることを表現する。

ブリオバトルでは好きな本を紹介することが目的であるが、谷口（2013）が指摘しているように、「本を通して人を知る」場であり、発表者の感動をより普遍的なものとして共有し、聴衆と共感しあうことが求められる。そのため、自らの体験を述べるだけでなく、より一般化して普遍性のあることとして表現する力が必要であるとされる。

(2)と(3)の口頭表現能力について、例えばCEFR¹のB2能力記述文において、「記述とプレゼンテーションを明確かつ体系的に展開できる。要点を見失わずに、関連する詳細情報を付け加えて、内容を補足できる。」「自分の関心のある分野に関連した、広範囲な話題について、明確かつ詳細に記述、プレゼンテーションができる。事項を補足しながら、関連事例を挙げて、主張を強化、展開することができる。」と述べているように、学部レベルの学習者にとって必須のスキルである。

また、堀（2012）は中級後半の学習者の口頭発表の機能を数量的に調査した結果、聞き手への配慮表現や、発表の開始部に必要とされる表現は多く使用されており、問題がなかったが、使用が少ない表現としては、終結部で発表をまとめる表現、引用、意見表明の表現、根拠を積み上げて客観的に意見を述べる機能を果たす表現であることを指摘している。

そこで、以上の課題を克服するために、総合的に練習することができるタスクとして、ブリオバトルを取り入れる意義があると考えられる。

4. 本実践の概要

4. 1 本実践のコースの概要とコーススケジュール

本実践授業の概要として、コースの対象者、目標、スケジュールと、ブリオバトルに至るコースの前半について述べる。

1 Council of Europe(2001)が作成した言語参照枠である。A1からC2までの6段階に分け、能力記述文がスキルごとに示されている。

コースの対象者：文系学部2年生の留学生を対象とする。本実践授業の受講生は34名

受講生の日本語レベル：中級後半から上級

コースの目標：日本語に表れた日本文化を知り、アカデミックな場面の必要とされる豊かな言語表現を習得すること。

コースの内容：①日本語の言語文化に関する記事を読み、文法力、語彙力、読解力をピア活動を通して高める、②アカデミックな場面に必要な日本語能力に必要とされる基礎的スキルを身につけるための練習を行う、③総合的な活動として、ブリオバトルを行う、④レポートに書くための文章表現の基礎を身につける

コースのスケジュールを表1に示す。表1は、左から回数、授業活動の概要、基本的スキルの内容、最右列がブリオバトルに関連する活動である。

前半ではコース目標である日本語に表れた日本文化を知るため、野本京子ほか編(1996)『日本をたどりなおす 29の方法 国際日本研究入門』から4編を選んで読解教材とした。読解では、学内のLMS (Learning Management System) を利用して授業前に読解、語・表現の確認、段落の要約を順に課した。授業では、各教材に2コマから3コマを使って、ピア活動による内容に関する質疑応答、内容確認、段落ごとの要点のまとめ、全体の要約を口頭で表現する、テキスト記載のタスク(本文質問、基本タスク、発展タスク)から授業内容に合ったものを選んで行う、などの活動を行った。

ブリオバトルは初回と7回目に予告をした上で、12回以降に活動を行った。

表1 コースの授業活動, 扱った基本スキル, ブリオバトルに関連する活動一覧

回	授業活動	基本的スキル	ブリオバトルに関連する活動
1	コース説明, 日本語学習の目標, 学習方法 基礎練習	①引用のし方, ②質問のしかた	コーススケジュール ブリオバトル予告
2	読解①	③要約のし方その1	
3	「日本にはなぜあいさつ表現が多いのか」 読解② 「『すみません』の言外の意味」 読解③ 「日本のポピュラーカルチャー」 読解④ 「アニメ映画に吹く風」	④クリティカルリーディング	
4		⑤要約のし方その2, パラフレーズの方法	
5			
6			
7			ブリオバトル紹介, 発表予告, 読解資料指示, レジューメ例見せる
8			
9			
10			
11			ブリオバトルテーマ決定を予告
12	ブリオバトル発表準備: テーマの決定		テーマについて話す
13	テーマ発表準備: レジューメ作成		レジューメを書く
14	発表, ディスカッション		発表, 質疑応答, チャンプ本選出
15	活動のまとめ, レポート作成準備		ブリオバトルを元に, レポートの構成, 文章表現を考える

4. 2 本コースにおけるビブリオバトルの位置づけと目的

3章で見たように、学習者に必要とされる日本語能力と、ブリオバトルで高評価を得られる条件が共通していることから、授業に取り入れることは意義あると考えられる。

さらに加えて、ブリオバトルならではの利点は、自分の好きな作品を紹介するという性格上、学習者が非常に楽しんで取り組み、話す活動を情熱を持って行えることである。特に後者については、アンホルト(2008)が科学分野の口頭発表について、「情熱は成功を90パーセント約束する」と述べているようにアカデミックな発表であっても、正確さや客観的な正しさに加えて、聞き手に情熱を持って

話しかけることが必要である。そこで、これらを同時にトレーニングすることができるのは、ブリオバトルの特長であると言える。

以上から、本実践では、コース前半で読解を通して文法力、語彙力を高め、内容を把握し、要約するタスクを行ったあと、コースの後半において総合的なタスクとしてブリオバトルを取り入れる。特にテーマとする本／作品は、個人で読むことを課しており、自律した読み手となることを目標とする。

4. 3 ビブリオバトルの題材

ブリオバトルの題材としたのは、学習者の能力差に考慮し、なるべく幅広く題材を求めるため、これまでに各自が読んで感動した本に加えて、青空文庫で無料で読める作品、さらに新聞記事、留学生の体験を元にした作文、日本文化に関する教科書なども候補に挙げた。主なものを下記に挙げる。

朝日新聞記事：「カイロレポート」「ツイッターで災害情報」「音のない世界に生きて」「日本語の手紙」「世界に羽ばたく日本ポップカルチャー」「日本のホップ・カルチャー・ファンは潜在的日本語学習者といえるか」

大橋理枝, ダニエル・ロング (2011) 『放送大学教材12192 日本語からたどる文化』より
「イノベーションとお茶」「タブーと婉曲表現」「空間の意識のしかた呼びかけと人間関係」「時間の観念」「身体語と表現」「物とコミュニケーション」「変化する日本語」「方言とアイデンティティ」

これらの記事は学内 LMS を用いて学習者に提示した。

4. 4 クラスでの指導のポイント

表 1 に示したように、十分な準備期間を取るため、学期はじめと途中に数度にわたって予告し、読書を促した。初回に活動の予告、第 7 回に詳しい紹介と、読解の資料、レジュメ例の提示を行い、他の回でも適宜進捗を聞きつつ、11 回にはテーマを決定するよう予告した上で、12 回と 13 回に発表準備、14 回が発表、15 回はブリオバトルを元にした期末レポートの準備とした。

12 回目の授業では、予め学内 LMS から You Tube 上の『『ビブリオバトル首都決戦 2012』決勝戦』の 2 本の録画を見て比較し、よい点と改善点を考えさせた上で、授業でディスカッションをさせ、発表の目標や留意点を明確にした。実際にチャンプ本の発表例を見せることで、受講生が発表のイメージを具体的につかみ、要求されている完成度を理解させることが目的であった。

その他、授業での指導のポイントは、①内容に盛り込むべき点、②言語以外のノンバーバルコミュニケーションにおいて気をつける点、③グループ活動による相互のアドバイス、である。

また、ブリオバトルの標準的なルールは 2.1 に挙げたとおりであるが、留学生であることを考慮し、レジュメを作成させた。レジュメの書き方は野本他(1996:66)に紹介されている「ブックレポート」を参考にするよう予め指示した。ただし、「ブックレポート」に示されている内容は「書誌情報」「作者の紹介」「あらすじ」「考察・感想など」の項目であるが、授業でのブリオバトルのレジュメとしては、ブリオバトルのための配付資料であることを考慮し、以下の通りとした。

- 「あらすじ」は、物語以外では不要
- 登場人物の関係図なども載せてよい
- 耳で聞いてわかりにくい語を書いておく（難しい語の訳や固有名詞など）
- なぜその本／記事を選んだのか、作品の感想、その本／記事の社会に投げかける問題とそれに対

する自分の主張を入れること

最後の点に関連して、紹介する作品が文学作品か新聞記事・評論かによって、発表の主旨は変わってくる。そこで、文学作品であれば感想や自分に与えた影響について述べ、新聞記事・評論などでは自分の分析や提言を述べるよう指導し、配付資料の記述に反映させるよう指示した。

また、発表においては、レジュメを読み上げることはよくないと指導した。レジュメは、発表に先立ってクラスで作成する時間を持った。

4. 5 クラスでの実施方法

当日の出席者は30名であったため、まず5名のグループで発表を行い、チャンプ本を決めた。その後、各グループから選ばれたチャンプ本について、クラスメートの前で6名が発表を行い、グランドチャンプ本を決定するという方法を採用した。また、教師が発表を評価するために、グループでの各自の発表を音声に録音し、学内LMSからレジュメと共にアップロードさせることとした。

5. 発表の分析

優れた発表では、ブリオバトルに要約がどのように取り込まれていたか分析する。調査に協力が得られたチャンプ本6編とチャンプ本には選ばれなかったが優れた2編を分析した。その中から、優れた要約の例と、さらなる要約の工夫が望まれる例を指摘する。

5. 1 優れた発表例

グランドチャンピオンには選ばれなかったが、優れた発表として発表1のスク립トを示す。表2は、右列に発表内容、左列に筆者が分析した内容の構成を示す。本文は発表者自身の書き起こしを基に、筆者が音声を確認した。誤用などは、発表のままである。

発表全体の構成は、タイトルに続いて作者の紹介、本の要約、感想と続き、最後に本を勧めて挨拶となっており、5分間で過不足なく必要な情報と感想を伝えている。本の要約の部分はさらに4つの部分から構成され、本の主張、主張に関する補足説明、主張を示すエピソード、まとめ（換言）である。本の主張は、「ドキュメンタリーは主観的な表現であり、決して『公正中立』な視点を提供するものではないという主張の本です」と、1文で端的に表現され、その後から補足説明を行い、わかりやすい例としてロバート・フラハティのドキュメンタリー映画を取り上げている。最後にまとめとして、かなりのシーンで「演出」が使用されているが、「現実をフィクショナイズする作業はドキュメンタリーなのである」と指摘している。

このように、本の要約の中の構成もわかりやすく、聞き手に理解しやすいと考えられる。

表2 発表1のスク립ト（構成欄は筆者による）

構成	発表内容
タイトルの紹介	今日は私が最近読んだ「それでもドキュメンタリーは嘘をつく」という本を紹介したいと思います。
作者の紹介	作者は森 達也さんです。森さんは、1956年5月広島県で生まれました。1998年オウム真理教の荒木浩を主人公とするドキュメンタリー映画「A」を公開し、か国映画祭に出品し、海外でも高い評価を受けました。2001年映画「A2」を公開し、山形国際ドキュメンタリー映画祭で特別賞、市民賞を受賞しました。それ以降、文章を書き続けながら、フリーランスのディレクターとして「放送禁止歌」、「ドキュメンタリーは嘘をつく」などテレビ、ドキュメンタリーの制作も作りました。

本の要約	本の主張	次は本を紹介したいと思います。ドキュメンタリーは主観的な表現であり、決して「公正中立」な視点を提供するものではないという主張の本です。
	主張に関する補足説明	「主観を完全に排除して中立な位置に視点を置くことがそもそも不可能だ。」と書かれています。つまり、ドキュメンタリーというジャンルに付せられる「事実の客観的記録」というイメージは、撮る側、見る側の間違いです。
	主張を示すエピソード	本の中に一つの例を書かれています。「ドキュメンタリー映画の父」と言われているロバート・フラハティの代表作に『極北の怪異』という北極圏に住むイヌイット族の生活をかいたドキュメンタリー映画があります。しかし撮影当日、まだフィルムの感度が悪く、逆光のカメラポジションではまともに撮れませんでした。フラハティは現地に現像設備を運び込み、撮影後すぐに現像して、撮りたてのフィルムをイヌイット族の人たちに見せたそうです。彼らはたちまちどう動けば良いのか、どう映るのかを理解し、フラハティら撮影クルーに協力したそうです。
	まとめ（換言）	実はこれはドキュメンタリーのかかなりの数のショットは「演出」です。現実をフィクショナル化する作業はドキュメンタリーなのであるという結論が出てきました。
感想	感想	最後、自分の感想を話したいと思います。人の手が加わっているものは客観的なものではないと思います。例えば、ニュースです。何を報道するか、どのように報道するなどは全部編集者たちに決められます。それは大きな「主観」があるでしょうか。ドキュメンタリーも同じで、撮りたいものしか撮らないので、ドキュメンタリーの意味が無くなってしまいます。しかし、自らの参与は不可能なことであり、主観から逃げることは非常に難しいです。
	本から受けた影響	この本を読んでから、今後、ドキュメンタリーやニュースを見る時、全て信じてはいけなく、自分も事実かどうかを考えなければならないと思います。
聞き手への勧め		この本は思っていたより面白いので、よかったらぜひ読んでみてください。
終わりの挨拶		以上です。ありがとうございます。

5. 2 今後の指導が必要な発表例

次に、要約部分に過不足があり、今後の指導が必要であると思われる2つの例を挙げる。発表2は、レジュメの見出し番号を示しながら発表するなど、聞き手の理解を助ける工夫をしているが、作品の概要に情報が不足しており、聞き手の理解がついて行けなくなった例である。

表3 発表2のスク립トの一部（構成、下線は筆者）

構成	発表内容	
タイトルの紹介	本日紹介したい本は、一番の通り、「十二国記」1作目「月の影 影の海」になります。	
選んだ理由	なぜこのファンタジー小説を紹介したいと言われましたら、私はその小説の虜でもあります。その小説が書いていた中国風のファンタジー世界ではとても細かく書いておりますし、その12の国の中の話がすごく面白くて、それはその作品の一つの魅力であることを私は考えております。	
紹介したいこと	でも今日は、本日一番紹介したいのは、本の魅力はそれだけではなく、その中に人生に関して人々に関しての触れ合いが、一番の最大の魅力だと私は思っております。	
主人公について	主人公の紹介	その中に、3番のところ、あらすじのところに書いてた、中嶋陽子は本作の主人公になります。それは普通の女子高生で、人並みの悩みもあります。例えば、親の教えの中でもいい子を演じなきゃいけない、クラスの中にいじめられた子を救いたいの、他の目を気にしてて、それを救えることができなくて、ことがあります。
	共感する点	それは私たちの中でも重なっているのではないのでしょうか。ですが、その異世界に連れられて、いろいろの人にあつてから裏切られもあり、最後にその成長していくところが私たちの成長している人生ではないのでしょうか。私は考えております。
好きなエピソード	場面の紹介	その中に一番好きなエピソードがあります。その私が赤い線を引いてた<半獣>楽俊という人と会ってるところが、一つのエピソードがすごく好きです。
	エピソードの内容	その異世界の中でも半獣という存在はさぐがあったことがあります。どんだけ聡明な方としても、学校に行くことはできません。だいたいほかの人にもさぐがあったことが多いのです。その中でも中嶋陽子も異世界の人としては、ほかのさぐにもあったことがあり、最初楽俊としては同じそぐうの人にはすごく優しく接触しました。でも、後、中嶋陽子が慶東（けいとう）国の王が分かってからは距離を取りました。でも中嶋陽子としては最初は半獣の楽俊が救われたからこそ、あなたとは2歩の距離しかな

		<u>いのではないのでしょうか、人の心が遠ざかったから、楽俊を私は遠ざかったのではないのでしょうか</u> と言いました。
	本から受けた影響	それは私はすごく感動しまして、今、私たちと友人の間の距離でもそういうことではないのでしょうか。今後私が友達との接触間でもいろいろな役立ちました。その小説もちろん一つのエピソードの中に書いてわけではなく、いろんなところでもすごくいろんな人生に関して考えさせられることがあります。
	聞き手への勧め	その中の成長していける系列は小説の中にお楽しみいただければ幸いです。

タイトル紹介の部分で「ファンタジー小説」に触れているが、その内容についての説明がなく、好きなエピソードで突然「半獣」が登場し、固有名詞や不明瞭な語が多くなったため、聞き手が理解できなくなってしまった。また、エピソードの内容に出てくる引用文中の「あなた／私」(表3中の下線箇所)も、人物の関係が聞き手に分かりにくく、文意を理解しがたい1つの要因となっている。

この改善策としては、作品の舞台、登場人物、大まかなあらすじを述べる概要がタイトル紹介の後に付けられているとよかったであろう。

一方、発表3は、作品に対する思い入れが強く、紹介したい情報が多すぎて時間がなくなった例である。発表では、レジュメの見出し番号を示したり、聞き手に問いかけをしたりなど、聞き手の理解を助ける工夫をしている。しかし、本の紹介と作者の紹介のあと、作者の秘話を長く話しすぎ、この時点で持ち時間の半分を使ってしまった。そして、あらすじの後、感想を話し始めたところで残り1分となり(表4には示さず)、途中で発表を終えることになってしまった。

表4 発表3のスキプトの一部 (構成, 下線, イタリックは筆者)

構成	発表内容
タイトルの紹介	これから発表したい内容は、「精霊の守り人」という本です。
聞き手への問いかけ	皆さん、知ってますか。知る人もいるし、知らない人もいますね。
本の紹介	で、これは2007年3月 文庫版の新潮文庫より出版された本である。もっと昔のバージョンもあって、これが一番新しいバージョンになっていますね。
作者紹介	作者は、上橋 菜穂子氏、1962年生まれ、東京都生まれの、すごく有名な児童文学作家とファンタジー作家、SF作家と文化人類学者。大学では史学部で勉強してアフリカ神話にショックを受けて、さらにヨーロッパと東南アジアの各地の伝承を調べていて、とてもユニークな作風ですね。
作者秘話	構成を示す 作者秘話 で、作者の秘話に行きましょう。 上橋氏は、実は漫画とかアニメとかとても好きな方です。で、高校3年までは漫画家を目指しています。だけど、絵を描く才能がなくて、最終的には作家という方向に転じていますね。大学院まではもちろん、アニメが大好きだけど、その生活の緊迫さによってだんだん見れなくなって、だけど2007年にアニメ映画『攻殻機動隊』をテレビを介して視聴し、行く行くにはテレビシリーズの神山健治さんが監督する『攻殻機動隊』のシリーズにはまってしまうという話もありました。で、同年、つまり2007年で上橋氏の代表作である「獣の奏者」と守り人シリーズの中でも代表中の代表の「精霊の守り人」、つまり今話に取り上げられている本がアニメ化されています。とても喜ばれているという話もあって、しかも監督が偶然にも神山健治、つまり上橋さんが大好きになった『攻殻機動隊』の監督が、そちらの代表作のアニメ化の担当になっていることがとても歓喜した喜びがある止まないみたいです。
あらすじ	構成を示す 主人公について で、次に作品のあらすじを言います。4番になりますね。 本作のヒロインはバルサというとても武術に長けた女武者で、使用する武器は槍ですけど、皆さんが考える長い槍ではちがくて、短槍取りの短い槍です。その強さは鬼神が如くの戦いぶり、その武勇はもう私が語るまでもないと思いますけど、とにかくすごいです。すごいです。一騎当千。一人で何百人を相手しても、ばばばとみんなを打ちのめしますね。

	あらすじ	で、そのお話というと、実は縁があって、事故に見せかけて、実際は暗殺だという、王子が暗殺されそうなところを救って、しかもその王子を暗殺しようとするのが、王子の王様で、王子のお父さんである、父である王様です。その理由は何かというと、 <u>私が言ってしまうと皆さんもう嘘まなくなると思いますので、皆さんの発掘を楽しみにしていますよ。</u> で、バルサが王子であるチャグム王子を救い、その後は、母である二ノ妃に頼まれて、一緒に逃亡を始めましょうという楽しい逃亡劇の始まりです。
--	------	--

本のバージョン、作者の秘話は作品そのものを理解するためには不要な情報である。知っている情報をあれこれ詰め込むのではなく、制限時間に合わせて取捨選択することが重要であることを示している。

一方、あらすじに中に出てくる「その武勇はもう私が語るまでもないと思いますけど」という部分は、作品を読んだことがない聞き手には共感を得にくく、その後の「すごーいです」という感想は却って独りよがりな印象を与えてしまう。あらすじと感想が明確に分かれておらず、聞き手の情報の整理が阻害される。また、あらすじの途中の聞き手への語りかけ(下線イタリック部)も、効果は不明である。

以上、発表2、発表3は、作品に対する情熱は十分で、しかも話し方もなめらかで、聞き手への配慮もしているが、情報の不足や過多によって、残念ながら聞き手の理解が損なわれた例である。

6. 考察と今後の課題

本実践では、文章表現の要約の練習に引き続き、要約を必要とする総合的な活動としてブリオバトルを取り入れた授業を行った。発表の要約には、発表例で示したように、適切な発表が見られた一方、情報の過不足によって聞き手の理解が不十分となったものもあった。ブリオバトルにおいて望ましい要約は、発表1のようにまず紹介する本の主旨を短く述べた後、やや詳しい説明を加え、さらにそれを端的に示す例を出すことが必要であろう。文学作品ならば、作品の舞台、登場人物、大まかなあらすじを述べる概要と、それに続いて感動を伝えるために必要なエピソードをわかりやすく1分程度にまとめることが必要であろう。そして、その後で感想や自分の生き方にどのような影響を与えたかについて、わかりやすい構成で述べれば、聞き手の理解が得られるのではないだろうか。

コースの焦点としていた要約とピア活動については、学期末レポートによると、「文章のまとめが前よりできるようになったことに気がきました」「日本語の文章を読むレベルは向上できました。特に、文書のまとめ方について、練習するたびに、すぐに筆者の言いたいことにわかるようになりました。」「毎回の授業で、みんながそれぞれ異なったグループでお互いに自分の意見や感想などを交流すると、自分の日本語のレベルも去年より上がったと感ぜられる。」(原文のまま)という学生の記述が見られ、一定の効果は見られたのではないかと考える。

しかしながら、要約の力をブリオバトルにどの程度取り入れられたかについては、まだ未知であると言わざるを得ない。ブリオバトルの活動全体では学習者はおおむね楽しく、前向きに取り組んでいた。グループでの発表練習も活発であった。しかしながら、本番の発表では、好きな作品を語るがために話の内容が主観的になりすぎたり、要約と感想が分けられないなどの発表も見られた。また、数編の発表は剽窃が見られた。

これに関して2つの対策が必要であると考え。第一に、作品の内容理解のためのボトムアップとして語彙・文法を確認するステップを授業内で設けること、第二に、作品について自分の言葉で表現

するピア活動の時間を増やすこと、である。

第一の点について、八若(2001)はKintsch(1994)の読解モデルを引用し、理解のレベルには「表層構造」「テキストベース」「状況モデル」があるが、「状況モデル」の形成に至らない場合、文章を適切な形にして産出するのは負荷が大きいと指摘している。そこで、作品の理解をより深めるために、特に紹介したいエピソードを持ち寄って読み合うような活動を取り入れ、語彙・文法を確認して、「状況モデル」の形成に役立てることが必要であると考えます。

第二の点については、上記の読み合う活動に続いて、作品に使用されている語彙・文法を使って要約を述べる活動をすることで、語彙力、文法力が増し、発表でもわかりやすい叙述が期待できると考えられる。Swain(1995)は産出することによって気づき・きっかけを与える機能があることを指摘しているが、ピア活動を取り入れて産出させることで、一層効果が高まると考えられる。

本コースでは、ブリオバトルの導入の目的として、自律した読み手になることを挙げて活動を行ったが、そのための足場かけがもう少し必要であることが明らかとなり、その取り組みを今後の課題としたい。

参考文献

- 大橋理枝, ダニエル・ロング(2011)『放送大学教材12192 日本語からたどる文化』放送大学教育振興会
- 鎌田美千子・仁科浩子(2014)『アカデミック・ライティングのためのパラフレーズ演習：上級日本語学習者対象：言い換え書き換え』スリーエーネットワーク
- 菅原和夫・虫明美喜(2014)「話す活動に位置づけた知的書評合戦ビブリオバトルにおけるスピーチの特徴：独話的スピーチから聞き手を意識したスピーチへ」『日本語教育方法研究会誌』21(1), 92-93.
- 谷口忠大(2013)『ビブリオバトルー人を知り本を知る書評ゲーム』文芸春秋
- 東海大学教育センター口頭発表教材研究会(1995)『口頭発表と討論の技術コミュニケーション 留学生スピーチ・ディベートのために』東海大学出版会
- 野本京子・坂本恵・東京外国語大学国際日本研究センター編(1996)『日本をたどりなおす29の方法 国際日本研究入門』東京外国語大学出版会
- 八若壽美子(2001)「韓国人日本語学習者の作文における読解材料からの情報使用-読解能力との関連から」『世界の日本語教育：日本語教育論集』国際交流基金日本語事業部企画調整課編,(11), 103-114.
- 藤村知子(1998)「要約文作成における中級日本語学習者のパラフレーズの問題」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』24号, 東京外国語大学留学生日本語教育センター, 1-21.
- 堀恵子(2012)「アカデミック場面での口頭表現を支える文法能力を探る-補講コースJ800「話す」における口頭発表の分析から-」筑波大学留学生センター日本語教育論集27号, pp.15-34.
- 山路奈保子・須藤秀紹・李セロン(2013)「書評ゲーム『ビブリオバトル』導入の試みー日本語パブリックスピーキング技能育成のためにー」『日本語教育』155号, 175-188.
- ロバート・R・H・アンホルト著, 鈴木炎・イイイン・サンディ・リー訳(2008)『理系のための口頭発表術』ブルーバックス 講談社
- Council of Europe(2001) Common European Framework of Reference of Languages: Learning, teaching, assessment. Cambridge: Cambridge University Press (吉島茂・大橋理枝訳(2004)『外国語の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社)
- Kintsch, W. (1994) Text comprehension, memory, and learning. *The American Psychologist*, 49(4), 294-303.

Swain, M. (1995) Three functions of output in second language learning. In Cook, G. & Seilhofer, B. (eds.), Principles and practice in applied linguistics: Studies in honor of H. G. Widdowson, 125-144. Oxford: Oxford Univ. Press.

映像資料

「ビブリオバトル首都決戦 2012」決勝戦④ <<http://www.youtube.com/watch?v=A9cp1yyVcIk>>(2017年5月24日閲覧)

「ビブリオバトル首都決戦2013 決勝戦⑤★グランドチャンプ本★」

<<https://www.youtube.com/watch?v=8gxON7s3KZI>>(2017年5月24日閲覧)